

研究フロンティア

No.41

井上 治代 助教授

ライフデザイン学部健康スポーツ学科

(いの上 ちはる)

淑徳大学大学院社会科学研究科後期課程修了。2000年に東洋大学ライフデザイン学部助教授。専門は家族社会学、死と葬送の社会学、宗教学など。研究者・シンクタンク作家、市民団体代表の職を持つ。



「死」はある日突然、やってくる。

でもそれがいつなのかは誰にも分からな。だから、普通はあまり語ることがないし、あえて語るものではないという風潮もある。特に、生に満ちみちて、死とはまるでかけ離れた、若き溢れる頃には――。

「死」を社会学の観点から研究する研究者。さらには死にまつわる市民活動をライフワークとし、死とそれを取り巻く環境や家族関係についても多数の著書を持つシンクタンク作家である井上治代助教授は、スポーツが大好きでもとりわけ元氣この上ない学生が多い健康スポーツ学科で、彼らの対極にあるともいえる「死」を講義する。

「授業を始めてまだ半年。『死』と言われてもピンとこない」と苦笑しながら「将来、学生が専門知識や技術を身につけて仕事に就いたとしても、大切なのは相手が人間である

こと。その人が生きてきた背景や世帯の特徴、家族関係などを踏まえたうえで、それをどのようにサポートしていくか。生や死を正面から見つめ、心に寄り添えなければ、ここで修得した知識や技能を活かできません」と、この学部で「死」を学ぶことの意味を力説する。

文明国家になるほど、生死は見えなくなっていく。動植物の命の上に私たちの生が支えられていること。介護や臨終の場が家族の手から離れる中で、人の死の過程がシステム化されていくこと。「死を知つて、他人の命も自分の命も大切にできる。見えにくくなった死を伝えることは現代の重要課題。その伝え手としての使命を持つて、授業に臨む。

自らのテーマ「死」に据えたいきっかけは30歳の時。実母の死だった。

都会の典型的な核家族で2人姉妹「誰が跡を継ぐのか」「誰が墓を守るのか」。男女平等を、当たり前のごとくして育ち、もはや歴史的な出来事と思つていた「EJ意識、女性」というハインを初めて痛感した瞬間だった。

核家族で跡継ぎや長男のいない家は我が家だけではないはず。みな同じ思いを抱えているのだろうか。調べてみると、実に多くの人が同様の悩みを抱えていた。さらに「夫と同じ墓にありたくない」「実家の墓に入りたい」「墓を介して聞こえる声は現代の家族問題を如実に映し出しているように見えた。しかしこれらの

「死」「墓」をキーワードに、よりよい「生」を追求する

かつては世代同居があたりまえだった頃、どの家庭にも「生」と「死」は存在していた。しかし今、臨終は病院内で完結するようになった。さらに少子高齢化による家族形態の変化は、死後を

「家族がいらない人の増加を意味している。

日常から遠く離れてバーチャルなものになった「死」、家族では晴いきれなくなりつつある「死」。死のあり方を探るとは生き方を見つめるともいえる。井上助教授の「死の社会学」を希望する人々のために樹木葬の墓地も準備した。その新しいスタイルの墓地には、自分らしい死を求め、見学者が跡を絶たないという。

「いまや死および死後は選べる時代。臨死状態になった時、延命するのかもしれないが、墓も、墓石を建てるか自然に還るかなど、選択が多様になった。しかし、まだタイプとされがちな聖域でもある。しがらみから逃れ、よりよく生きるための死を追求したい。」

死という到達点があつてこそ、よりよいライフデザインを描けると言い切る井上助教授は学生たちに言う。「いつかは死ぬんだつて意識して生きないとソックン、時間は有限なんだから。今はそんなメッセージで「死」が持つたいなる深さに気づいて欲しいと願う。



井上助教授の著作の数々